

性格類型と公害に対する態度との関係

安 塚 俊 行

Relationship between Personality Type and an Attitude on Environmental Pollution

Toshiyuki YASUZUKA

Abstract

In order to clarify the relationship between personality type and an attitude toward environmental pollution, a questionnaire was given to the 68 students of the faculty of technology. Among the five personality types, B type was more tolerant of pollution than A type. The former was emotionally unstable, socially maladjusted, active, impulsive, non-introspective and socially extraverted. This result was inconsistent with that of the preceding study. Three hypotheses were proposed to interpret this inconsistency. Those who take interest in an automobile were more optimistic. They think that the technology of pollution control will extinguish environmental disruption.

目 的

環境汚染に関する心理学的研究は漸増の傾向にあるが、それらの多くは被験者のいわゆる demographic factor を探究したものである。これに対して安塚¹⁾は、「上述の研究では、環境汚染に対する態度を間接的に把握するにとどまり、同一の刺激情況にある者は公害と考え、他の者は公害とは考えないといった個人差を明確には説明し得ない」という立場から、被験者の性格をも考慮する必要があることを強調し、情緒不安定・社会的不適応消極型の性格類型と現状受忍の態度との相関関係を明らかにした。すなわち、このタイプの者は公害に対する tolerance が低いのである。このように、性格類型と環境汚染に対する態度との関係の一般性を探るのが主な目的であり、具体的には、異なった被験者においても同様の傾向が出現するか否かを検討する。

方 法

被調査者 幾徳工業大学工学部1年生(哲学受講生68名)。

調査年月 1977年4月。

昭和52年9月29日受理

性格検査 YG 性格検査を使用した。この検査は、D (抑うつ性)、C (回帰性傾向)、I (劣等感)、N (神経質)、O (客観性)、Co (協調性)、Ag (攻撃性)、G (一般的活動性)、R (のんきさ)、T (思考的外向)、A (支配性)、S (社会的外向) という12の下位尺度から成り、各々の得点プロフィールによってA類(平均型)、B類(不安定不適応積極型)、C類(安定消極型)、D類(安定適応積極型)、E類(不安定不適応消極型)の性格類型に分けることができる。

公害に関する質問紙 (1) フェースシート……性別、父母の年齢・学歴・職業、家の生活水準、購読新聞・雑誌・週刊誌、自動車の有無、支持政党、よく見るテレビ番組、趣味等の13項目について記入させた。

(2) 公害に対する態度測定 ……公害意識については既に5個の因子が抽出されているので²⁾、因子負荷量0.45以上を基準に各々4項目を採用し合計20項目とした。更にこれらをランダムに配列し、賛成-反対の5段階評定をさせた。因子名および質問紙における項目番号は下記の通りである。

F I (革新) ……9, 11, 15, 16

F II (現状受忍) ……3, 4, 6, 20

F III (現状悲観) ……1, 8, 12, 17

F IV (悲観論).....2, 5, 13, 14

F V (客観).....7, 10, 18, 19

前述の目的に照らして、以下では主に F II (現状受忍因子) について報告する。F II 4 項目の具体的記述は、

項目3……近所の町工場の騒音もそこに働いている人の生活がかかっているのだからがまんすべきだ。

項目4……公害防止といっても人間の努力には限界があると思う。

項目6……企業の発展のためには、公害の発生もやむをえない。

項目20……公害は長い人類の歴史の1コマにすぎない。

であり、F II 得点とはいわばこれら4項目の得点の合成得点である。また回答は YG→フェースシート→公害に対する態度測定 of 順になされた。これは順序効果を除くためである。更に、特定個人を取り上げて問題にすることはない旨、強調された。

結 果

性格類型そのものの出現頻度は Table 1 に見られるごとく特定のタイプが高い ($X^2=15.382$ $df=4$ $p<.01$)。次に F II 得点の分散分析を行ったのが Table 2 である。5% 水準で有意であったので、更に Tukey の法を適用したところ、 $\bar{X}_B - \bar{X}_A = 2.44$, $WSD = 2.22$ と

Table 1 Personality type and F II score

type	A	B	C	D	E
M	8.64	11.08	10.08	9.56	9.00
SD	1.72	2.10	1.80	1.83	2.68
N	14	12	12	25	5

Table 2 Analysis of variance of F II score

Source	SS	df	MS	F
Between types	43.31	4	10.83	2.694*
Within types	253.20	63	4.02	

* $p<.05$

なり、A-B 間にのみ有意な差が得られた ($p<.05$)。従って B 類 (不安定不適応積極型) の方が A 類 (平均型) よりも公害に対して許容的であると言える。これは調和のとれたパーソナリティの者よりも多少偏りのある者の方が公害に対して現状受忍的であることを示しており、その偏り方を示したのが Table 3 である (DCIN に関しては等分散でないので Cochran-Cox の法を適用した)。

すなわち、B 類は A 類よりも情緒不安定、社会的不適応、活動的、衝動的、内省的でない、主導権を握るといったパーソナリティ特性を持っているのである。この理由については後述する。

フェースシートの5番目「家の生活水準」は、上1名、中の上15名、中の中47名、中の下4名、下1名であった。これは現実の生活水準ではなく、生活意識水準であり、少なくとも中の中又は中の上と考えている者が多い事を示している。しかし生活水準と各因子での得点の間には有意な差が得られなかった。

6番目の「家庭の職業」は父親の場合、ホワイトカラー11名、自営業11名、農林漁業6名、ブルーカラー9名、専門的・管理的職業16名、その他15名であった。これら職業による因子の得点の差もみられなかった。

8番目の「自動車の有無」は、F III (現状悲観) において自動車所有群 ($\bar{X}=12.38$) の方が非所有群 ($\bar{X}=11.38$) よりも高い傾向が見出された ($t=1.994$ $df=66$ $.05<p<.10$)。

10番目の「よく見るテレビ番組」はニュースという

Table 3 Comparison between A type and B type

	DCIN	OCaAg	AgG	GR	RT	AS
A (N=14) M	39.86	28.43	22.00	22.64	19.07	19.29
SD	7.05	5.91	4.91	3.88	4.65	4.85
B (N=12) M	64.58	48.08	30.50	31.67	30.67	29.33
SD	12.82	8.49	4.72	4.66	6.55	7.07
t	5.707***	5.936***	4.304***	5.180***	5.052***	4.102***

*** $p<.001$

記述のある者 8 名, 歌・野球等の娯楽番組 54 名, 無記入 6 名であった。

11 番目の「趣味」は車 14 名, それ以外 52 名で, 両群は F IV (悲観論) において有意差が得られた ($t=2.341$ $df=64$ $p<.05$)。すなわち車以外の趣味を挙げたの方が公害に対して悲観的である。このことは F IV の各項目について検定を行った結果からもうかがえる。例えば質問項目 2 「公害防止技術を開発すれば, 公害もなくなるだろう」に対しては, 車の趣味を持つ者の $\bar{X}=4.00$, それ以外の者の $\bar{X}=3.21$ でこの差は有意であった ($t=2.209$ $df=64$ $p<.05$)。これには最近の自動車の排ガス規制が影響しているかも知れない。

12 番目の「通学」は自宅からが 44 名, 自宅以外が 24 名であった。

考 察

前回の被調査者 (幾徳工大 2 年生教育心理学受講生) においては, F II 得点に関して, A 類 (平均型: $\bar{X}=10.70$) と E 類 (不安定不適応消極型: $\bar{X}=6.90$) の間に有意差が見出された²⁾。A 類は, 町工場の騒音はがまんすべきであり, 人間の努力の限界には疑問を抱き, 公害の発生をやむをえないものとは考えず, E 類は, 町工場の騒音はがまんすべきものではなく, 人間の努力には限界がないと思い, また公害の発生をやむをえないものとは全く考えていないのである。換言すれば A 類の方が E 類よりも現状受忍的であり,

① 調和のとれたパーソナリティの者の方が公害に対する tolerance が高い
という仮説を立てることができる。

一方, 今回の被調査者 (同大学 1 年生哲学受講生) の場合には, A 類 ($\bar{X}=8.64$) と B 類 (不安定不適応積極型: $\bar{X}=11.08$) の間に有意差が得られた。従って前回とは逆に, A 類より B 類の方が現状受忍的であると言える。そこで,

② 調和のとれたパーソナリティの者よりも多少偏りのあるパーソナリティの者の方が公害に対する tolerance が高い
という仮説も成り立つ。

更に,

③ 前回と今回の結果の不一致は被調査者の相違によるものであって, 学年・履修希望科目の差異が影響している
ということも無視できない。

まず①, ②の妥当性について考察すると, ①の方が論

理的のようであるが, それは性格類型が公害という社会的事象に対する態度を規定するということを前提にしては。しかしこの関係は現在のところ必ずしも明らかではなく, また公害に対して社会的に望ましい反応をする者は個人レベルの心理的葛藤が多いというタテマエ・ホネ的な見方をすれば②も十分成立し得るのである。それ故, ある特定の性格類型と社会的態度との因果関係あるいは相互作用を解明するには, 今回のような調査では不十分で, 何らかの実験の方法を導入しなければならないであろう。その際, パーソナリティの偏りの質・量・方向性をも考慮しなければならないことは言うまでもない。

なお③は①, ②と異なり方法論上の問題であって, 別の 2 年生あるいは 1 年生を対象に資料を累積すれば解決できるものと思われる。発達論的には, 一般に年齢が長ずるにつれて社会的な事象への関心が高まると予想されるので, 同一の質問紙を様々な年齢層に実施することも必要であろう。

次に, 「自動車の有無」及び「趣味」についての結果であるが, 堀³⁾によると, これは開発・経済優先に否定的な群と肯定的な群とをかなり弁別するという。前回の調査では自動車所有者の方が現状受忍的であり, 今回は所有者の方が悲観的でないすなわち楽観的である傾向がうかがえる。ここにも自動車を所有しているから受忍的・楽観的になるのか, もともと受忍的・楽観的な人は環境汚染を気にせず平気で自動車を購入し乗り回すのかという関係性の問題が内包されている。しかし自動車に乗るということは単に環境を汚染するか否かという 1 つの要因のみによって態度決定がなされるわけではないので, ここで明確な結論を下すことはできない。

最後に, 今回は前回と比較するため全く同一の分析法を用いたが, フェースシートの質問間には学歴と職業のように交互作用があると考えられるものが多い。それ故, むしろ 2 要因以上の分散分析法の方が望ましく, この点に関しては今後の課題としたい。

要 約

工学部の 1 年生 68 名の性格及び公害に対する態度が質問紙法によって調査された。その結果は下記の通りである。

- (1) 性格類型の出現頻度には差がある。
- (2) A 類よりも情緒不安定・社会的不適応積極型である B 類の方が公害に対して現状受忍的である。
- (3) 自動車所有者群の方が非所有者群よりも受忍的・楽

観的である。

(4) A 類と E 類の差, A 類と B 類の差から 3つの仮説が提唱された。その検証は今後の研究を待たねばならないが, 実験法の有効性が示唆された。

(5) フェースシートの demographic factor については分析法が問題とされた。

文 献

- 1) 安塚俊行 1977 環境汚染に対する態度 日本心理学会第 41 回大会発表論文集, 1138-1139.
- 2) 安塚俊行 1976 公害意識の因子分析的研究 日本心理学会第 40 回大会発表論文集, 1137-1138.
- 3) 堀 洋道 1973 公害に関する知識と意識の関連 東京都公害研究所年報, 3, 292-297.